灰方氏冊女の侍ハ已より一夕話の小野寺秀和の侍より附記しそ
侍より再こそ小贄ちび拙ずるふを世時人侍ふ秀和同息秀冨自害
と賜ふの侍ふ芸ひてや数日食とを断て身まうりぬと云り奚地ハ京
師本國寺の境内て芸院ゆくるこれ為ち帳ハ法名を書りて「冨女
や子の待んものといるゆすー何ぞこの世ハ名ひおくべきと辞世の歌
ありて自滅ごとをる人然ばバ双とをて死るゆやと云これと朱雄ら
辞して云上の件の文表ゆくハ冨とよするふゆくろ夫子切腹と奚
子ーこふをえて飢死ーるやうふくいぶるり秀和より おるる又ハ
中ふるーなくそめぢもあんちんふくもあるぬーきろこそ又ろのーさ
ふあるをとまりろまふこもも芸侍のまへ子れバこれる名ひおくとふくれこそ
子どあるをとへず夫子忠死の人ハ冊女自害のをハゆねてより約束

おきんと福子ーと云り此辞さるをこそおるる時人侍あるハふく
考へざるの誤りありこの事をいきろ一夕話ハ考ーこれと冊女ぐ完
をろぶんろあるゆくびこそふをのまを詳ふす

赤穂義士隨筆巻之四 全終

210.5
4

赤穂義士傳一夕話已行于世其四十七士之事蹟瞭然可見也於是義士書翰且手澤遺物等世人傳以為珍者不少今隨見聞圖之識之輯錄焉遂附義士傳一夕話刻之云爰及屋烏於此書云云

安政二年乙卯秋日

北峰用人成識

義士傳

赤穂義士傳一夕話

大本　全拾丹

山崎美成先生輯　橋本玉蘭画圖

赤穂義臣の事蹟記録少からず銘々の傳記を拳て精しく印行せハ鮮し今この書ハ実傳に依て諸書を參考し赤城離散の後東西に往反し江戸に在ハ姓名を更て仇家の動静を覘ひまさ復讐に成る事ハ勿論其人々の言行勇壯智略のかどを明らかに勅し或ひハ親族妻孥の操遺ものこと掲げ出して実に勧善の一助ともなる赤穂義士の実傳に依て一夕話に勝ゆハかり赤城落穂集小讀合せ看るハ首尾全備して さらに其世に有る心地して看官自忠孝を感ふの亀鑑ともなるべきの珍書なり

石塚豊芥子編輯

海外漂流年代記

前編　後編　各壹袋宛

本朝開闢のむかしより三韓および唐山人帰化せしを始めとし或ひ商賈異朝に渡りて漂流して異国に往来し其年月を正して年序を連ぬ記しる

山崎美成編輯

赤穂義士傳

全五冊

此書八室鳩巣ガ著サレシ赤穂義士ノ事ヲ漢文ヲモテ疎ナルトヒラガナ實事アリ

松亭金水著

王蘭齋貞秀画

忠勇阿佐倉記

三編揃 拾五冊

先年我藩ニテ大當リヲトリ阿佐倉ノ當吾ト云フ義夫ノ傳記ヲ板ニ彫リ利殿中ノ事ヲ入加シ當吾ガ本傳ニ拘ハラズ世ニ見ヲ貴キ有ルカノ人ノ忠勇義侠ヲ表ス人ノ上ニ連ル人ニ信義アル人ノ侠ヲ称リ幼者ニ忠義ヲ勧ムノ一端ニアリ

松亭金水著

高木廼實傳

前編五冊

世ニ名高キ武勇ノ誉ヲ高木折右ヱ門ガ本傳ヲ続書ケ索ク生ヲ立テ日本侠ヲ発揮シ一人ノ雄ヲ校ヒ一人ノ侠ヲ表ス

其後一ノ人ヲ感動セシ佐拓ヲ多ク成ル有ク其ヲ有ク拍ヒ牛ニ

カノ人世ノ傳記ニ固ク忠肝義胆ノ武夫ヲ時ハ道ノ為ニ

老ヒ云フ人ノ係ルモ有ル眼ヲ表ス如ク云フ異ノ竹子アリ

寶集堂發兌藏板目録

日本橋中通ヲ下槙町

大和屋喜兵衛

書物問屋

發行

大坂心齋橋筋博勞町　河内屋茂兵衛

同　北久太郎町　秋田屋市兵衛

江戸芝神明前　岡田屋嘉七

同日本橋通一町目　須原屋茂兵衛

同　二町目　須原屋新兵衛

同　四町目　須原屋佐助

同浅草茅町二町目　須原屋伊八

同横山町三町目　和泉屋金右衛門

同　壹町目　出雲寺萬次郎

同大傳馬町二町目　丁子屋平兵衛

同芝神明前　和泉屋吉兵衛

同日本橋通二町目　山城屋佐兵衛

同中橋東中通下槙町　大和屋喜兵衛

書肆

不許一人